



筑紫大学図書リポジトリー

1. Les villes dans le Voyage en Orient(6) : Les Nuits du Ramazan

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/687 |

『東方紀行』における都市（6）

—ラマザンの夜—

間瀬玲子

Les villes dans le *Voyage en Orient* (6)

—Les Nuits du Ramazan—

Reiko MASE

I. 序

ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は前論文で述べたように1843年7月25日頃にコンスタンチノープル（現在のイスタンブール）に到着した。（1）ネルヴァルがこの都市を訪問した目的の一つは「ラマザンの夜」を経験することであった。（2）ラマザンはイスラム教暦の第9月であり、この間イスラム教徒は日の出から日没まで断食をすることになっていた。ネルヴァルはイスラム教のこの習慣を単なる好奇心で経験したいと思ったのであろうか。単にそのために母国フランスから異国の都市であるコンスタンチノープルに行ったのであろうか。本論文ではネルヴァルにとっての「ラマザンの夜」を『東方紀行』を読みながら考察してみたいと考える。なお『東方紀行』は虚構と事実が入り混じった世界であり、『東方紀行』の話者「私」とネルヴァルは完全に同一人物ではない。

II. コンスタンチノープルの都市構造

ネルヴァルはすでに述べたように1843年7月25日頃にコンスタンチノープル

に到着した後、ペラ地区に居住した。

Nous étions partis de Péra, la ville franque, pour nous rendre aux bazars de Stamboul, la ville turque. (3)

私たちはヨーロッパ人の町であるペラ地区を出発し、トルコ人の町であるスタンブールのバザール（市場）に行った。（4）

ネルヴァルが滞在した1843年のコンスタンチノープルは二つの地区が明確に分離していた。ひとつがヨーロッパの人たちの居住地であるペラ地区（現在のベヨール）であった。この地区には16世紀からヨーロッパ各国の大使館が設置され、おのずと華やかな雰囲気が漂う場所であった。それに対してスタンブールはトルコ人の居住区である。19世紀のフランスの作家であり、ネルヴァルの友人でもあるテオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier の作品集を編集したサルガ・ムサ Sarga Moussa はコンスタンチノープルについて次のように述べている。

Péra et Stamboul divisent Constantinople en deux parties. Mais à tout moment, la frontière peut être franchie entre ces deux mondes : Péra, quartier européen où logent les voyageurs ; Stamboul, ville musulmane où l'on fête le Ramadan. La capitale de l'Empire ottoman, dans sa géographie même, oscille entre l'Orient et l'Occident. (5)

ペラとスタンブールはコンスタンチノープルを二つの部分に分割している。しかし二つの世界の間の境界線は絶えず乗り越えることができた。旅人が宿泊するヨーロッパ人の地区であるペラ、ラマダンを祝うイスラム教徒の町、スタンブール。オスマン帝国の首都はまさにその地理的条件で東洋と西洋の間で揺れ動いている。

ネルヴァルは二つの地区の両方に住むことを経験した。しかしスタンブル地区に移り住んだ後もペラ地区に頻繁に気晴らしに出かけている。この二つの境界線は絶対的なものではなく、ネルヴァルが滞在した頃は自由に行き来していたことがこの作品から読み取ることができる。ネルヴァルがコンスタンチノープルという都市が大きく二つに分割できることを熟知し、そのことをどのように利用したかは後に述べたいと考える。

III. ラマザンの過ごし方

本論文の序で述べたように「ラマザン」はイスラム暦の第9月である。太陽が出ている間には食事を取らないことになっている。ネルヴァル全集の編者によると1843年のラマザンの日付は次のとおりである。

Précisons que le Ramazan a commencé, en 1843 (année du voyage), le 25 septembre … (6)

ラマザンは1843年（旅行の年）は9月25日に始まったことを明確にしよう。

ラマザンはイスラム暦によるので、年によって日付がかなり異なる。ラマザンの後に続くバイラムの祭りに関しては次の文章を参考にしたいと考える。

Gérard a assisté aux fêtes du Baïram (25-27 octobre 1843), s'est embarqué le 28 octobre sur un paquebot de l'État, *L'Eurotas*, et est passé de nouveau par Syra. (7)

ジェラールは（1843年10月25日から27日までの）バイラムの祭に参加した。そして10月28日政府の「ユーロタス号」に乗船し、再びシラ島を通過した。

バイラムの祭りは二つあり、ネルヴァルが参加したのは「シェケル・バイラム」と言われる祭りである。その二つの祭りに関してはネルヴァルの『東方紀行』を編集したジルベール・ルージュ Gilbert Rouger が次のように定義している。

Il s'agit, en réalité, du Petit Baïram, la plus importante cependant des deux fêtes musulmanes qui portent ce nom. On l'appelle encore *Sheker-Baïram* (fête des sucreries). Le Grand Baïram ou *Courban-Baïram* (fête des sacrifice) se célèbre soixante-dix jours après, le dernier jour de l'année musulmane. (8)

実際ここで問題なのは、この名前を持つイスラムの二つの祭りの中の最も重要な祭、「小バイラム」である。まだ「シェケル・バイラム」(砂糖菓子の祭)とも呼ばれている。「大バイラム」または「クルバン・バイラム」(犠牲の祭)は70日後、イスラム暦の最後の日にお祝いが行われる。

年譜から見ると、彼が参加したのは「小バイラム」であって、「大バイラム」には参加していない。それではネルヴァルの「ラマザンの夜」とそれに続く「バイラムの祭」の過ごし方を検討してみよう。彼はすでにコンスタンチノープルに滞在していた友人の画家カミーユ・ロジエ Camille Rogier に相談した。

Après m'être reposé, je m'informai du moyen d'assister aux fêtes nocturnes qui se donnaient dans la ville turque. Mon ami le peintre, que je revis dans la journée, familier avec les mœurs du pays, ne vit pour moi d'autre moyen que de me faire habiter Stamboul, ce qui présentait de grandes difficultés. (9)

一休みしてから、トルコ人街で行われる夜の祭に参加する手段を問い合わせた。昼間、画家である私の友人と再び会った。この国の風習に慣れ親しん

でいる彼は、スタンブルに住むより他にはないと言う。これは難しいことだった。

ロジエは1835年パリのドワイヤネ街に集まつた友人たちのひとりで画家である。1840年からコンスタンチノープルに滞在し、1843年に同地でネルヴァルと再会した。本論文の序で示したように『東方紀行』は虚構と事実が入り混じつた世界なので、この「私の友人」のモデルがロジエであると述べたほうが正確であろう。その友人の紹介で、アルメニア人商人と知り合いになった。この商人のアドバイスを引用しよう。

《Eh bien ! me dit-il, un moyen seul existe ici, c'est de vous faire passer pour Persan. Nous avons à Stamboul un caravansérail nommé Ildiz-Khan (Khan de l'Étoile), dans lequel on reçoit tous les marchands asiatiques des diverses communions musulmanes. (10)

彼は次のように言った。「ひとつだけ方法があります。ペルシア人のふりをするのです。スタンブルにイルディス＝ハン（星の宿）という名の隊商宿があります。そこではアジアのさまざまなイスラム宗派の商人を受け入れています。」

ネルヴァルは彼の父親あてに1843年10月5日頃コンスタンチノープルから次のような手紙を送っている。

…J'ai trouvé un logement très agréable, avec la plus belle vue, dans un Khan Ghildiz-Khan — c'est-à-dire hôtel de l'Étoile… (11)

私はイルディス＝ハン — つまり星の宿 — のとても眺めのよい部屋を見つけました。 (12)

この書簡の前後にネルヴァルはコンスタンチノープルから何通かの書簡を父親や知人あてに出している。それらの書簡から明言できることは、『東方紀行』の中でコンスタンチノープル関連部分に関してはかなり事実に即しているということである。『東方紀行』と上記の父親宛ての書簡で言及されている「イルディス＝ハン（星の宿）」について詳しく考察してみよう。

ネルヴァルに関する研究書に掲載されるロジエの絵「コンスタンチノープルでのジェラールの住居」に関してエリック・ビュフトー Eric Buffetaud は詳細な分析を加えている。

Yildiz-Han (hôtel de l'Étoile) (...) était situé près de la place de l'Obélisque mais, contrairement au dessin de Rogier, il comptait trois étages. (...) De toute façon, ce dessin nous présente un Khan à Istanbul très semblable à celui qu'habita le poète. (13)

イルディス＝ハン（星の宿）はオベリスク広場の近くに位置していた。しかしロジエの絵に反して（ネルヴァルが住んだ宿は）3階建てであった。いずれにせよこの絵は詩人（ネルヴァル）が住んだ宿にとてもよく似ている宿を私たちに示している。

ビュフトーはネルヴァルが作品内で自分が泊まった宿は3階建てであると書いているのに対して、ロジエの絵はどう見ても3階建てには見えないと主張を行っている。またロジエがネルヴァルが泊まった宿とよく似た宿を描いたのであろうとも主張している。実際に絵を見てみると、ロジエが描いた宿は2階建てである。この画家は厳密な意味で正確な宿を描いたのではなく、ネルヴァルが宿泊した宿の雰囲気を伝えたのであろうと思われる。

さてこのイルディス＝ハンが位置していた場所について分析してみよう。

Nous nous rendîmes à Ildiz-Khan, situé dans la plus haute partie de la

ville, près de la *Colonne brûlée*, l'un des restes les plus curieux de l'ancienne Byzance. (14)

私たちは町の高台にあるイルディス＝ハンに行った。古代ビザンチウム(後のコンスタンチノープル、現在のイスタンブール)の最も不思議な遺跡の一つである焼けた柱の近くにある。

プレイヤッド版の編者は「この円柱は班岩でできており、今日は火災で黒くなっている。コンスタンティヌス帝によりローマから運ばれたと言われている。」(15)と注をついている。奇妙な遺跡のそばの宿に宿泊した話者「私」は難なくペルシア人のふりをして、ラマザンを過ごした。当時の現地の人々はどのようにラマザンを過ごしたのかを見てみよう。

Quoique les Turcs dorment en général tout le jour pendant le mois de Ramazan, ils n'y sont pas obligés par la loi religieuse, et ne le font que pour n'avoir pas à songer à la nourriture, puisqu'il leur est défendu de manger avant le coucher du soleil. (16)

トルコ人は一般的にラマザンの月の間一日中眠っている。彼らは戒律によって決められているというより、食べ物のことを考える必要がないためにそうするしかない。というのは彼らは日没の前には食事を禁止されているからである。

上記の引用だけを読むと、ラマザンの間は宗教的戒律に縛られて、イスラム教徒は苦しい生活を強いられていることになる。しかしラマザンの夜の光景をネルヴァルは鮮やかに表現している。

Si la ville était illuminée splendidement pour qui la regardait des

hauteurs de Pétra, ses rues intérieures me parurent encore plus éclatantes.
(17)

ペラ地区の高台から見る者たちにとって、町は壮麗なイルミネーションで飾られているとすれば、通りは私にははるかに輝いているように思えた。

夜になると通りの店は飾り立てられ、カフェや酒場は人々でにぎわっている。このように昼と夜が明瞭に分かれるのがラマザンなのである。

『東方紀行』の「私」はイスラム教の戒律であるラマザンを経験しようと考えて、わざわざペラ地区からスタンブル地区に移り住んだ。それにもかかわらず昼間ペラ地区に戻ってヨーロッパ人たちとおしゃべりを楽しんだりしている。つまりスタンブル地区ではペルシア人を装い夜と昼の差異を経験し、ペラ地区に戻って本来のフランス人として過ごすという二重生活を体験したのであった。

IV. キリスト教の宗教行事との比較

ネルヴァルは『東方紀行』の読者のためにラマザンとそれに続くバイラムをキリスト教の宗教行事と比較している。

N'étant pas forcée, comme les musulmans, de dormir tout le jour et de passer la nuit entière dans les plaisirs pendant le bienheureux mois du ramazan, à la fois carême et carnaval, j'allais souvent à Pétra pour reprendre langue avec les Européens. (18)

イスラム教徒のように四旬節でありカーニバルであるラマザンの至福の月に、イスラム教徒のように昼間は眠り、夜は娯楽に明け暮れることを強いられているわけではないので、私はしばしばヨーロッパ人と話すためにペラ

地区に出向いて行った。

『仏和大辞典』では carême を「四旬節（キリストが40日間荒野で断食したのを想起するため信者に定められた悔悛の時期。灰の水曜日 mercredi des cendres から復活祭 Pâques の前日まで、日曜日を除き40日間）.」と定義している。

(19) また同辞典は carnaval を「謝肉祭、カーニヴァル（御公現の祝日 (Epiphanie) から灰の水曜日 (mercredi des Cendres) までの四旬節 (Carême) 前の期間）」と定義している。(20) ネルヴァルは読者にラマザンを正確に伝達するのにかなり苦労していると思われる。四旬節がラマザンの昼の時間であるとすると、カーニバルはラマザンの夜の時間に相当する。ラマザンをキリスト教の四旬節とカーニヴァルにたとえるしかないほど、特異な宗教行事であると感じたようである。つまり禁欲の時間と欲望開放の時間が交互に来るからである。

またラマザンの次にやってくるバイラムについて、ネルヴァルはどのように考えていたのであろうか。

Le Baïram des Turcs ressemble à notre jour de l'an. La civilisation européenne, qui pénètre peu à peu dans leurs coutumes, les attire de plus en plus, quant aux détails compatibles avec leur religion … (21)

トルコ人のバイラムは私たちの新年に似ている。彼らの風習に徐々に浸透しているヨーロッパ文明は彼らの宗教と両立する細かい部分で彼らをひきつけている。

ネルヴァルがバイラムと新年の祝いを比較したのは、その雰囲気を読者に伝えるためであると思われる。この比較が妥当であるかどうかは議論が分かれるところであるが、異宗教の行事を伝達する手段としては評価すべきところだと考えられる。

先に述べたようにネルヴァルは1843年10月25日から27日のバイラムに参加し

ている。彼が参加したのは「小バイラム」つまり「シュケル・バイラム（砂糖菓子の祭り）」である。この祭では、言葉が表すとおり人々が砂糖菓子を購入している。

En outre, si les dames turques font admirablement les confitures, le privilège des sucreries, des bonbons et des carton-nages splendides appartient à l'industrie parisienne. (22)

その上、トルコの女性はうまく菓子を作るのだが、砂糖菓子、ポンポン、豪華な箱入り菓子はパリ製がもてはやされる。

このように人々は砂糖菓子や色々なものを買って小バイラムの日々を過ごすのである。ネルヴァルは『東方紀行』において小バイラムの時期のコンスタンチノープルの賑いを思う存分描いていると言えよう。イスラム教徒だけでなく、異教徒も含めて多くの人々が祝う盛大な祭であった。

V. ゴーチエとコンスタンチノープル

ネルヴァルの少年時代からの友人であるテオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier はネルヴァルと同様にコンスタンチノープルを旅行した。ここでネルヴァルのコンスタンチノープル体験とゴーチエのそれとを比較することは意味あることだと思われるので、詳細に検討してみよう。ゴーチエが同地を旅行したのは1852年の夏である。これはネルヴァルがパリのシャルパンチエ書店から『東方紀行』第3版を出版して、約1年後のことであった。ジェラール＝ジョルジュ・ルメール Gérard-Georges Lemaire によると、1852年7月5日に友人あてに次のような手紙を送っている。

Je suis en course du matin au soir dans cette grande ville de

Constantinople… (23)

私はコンスタンチノープルの大都市で朝から晩まで走り回っています。

一夏をコンスタンチノープルで過ごしたゴーチエは、翌1853年に『コンスタンチノープル』*Constantinople* を出版した。ゴーチエはラマザンを次のように表現している。

Le Ramadan, comme chacun sait, est un carême doublé d'un carnaval; le jour appartient à l'austérité, la nuit au plaisir … (24)

周知のとおりラマダンはカーニヴァルを兼ねた四旬節である。昼は厳格さに属し、夜は快樂に属す…

ラマザン（ゴーチエはラマダンと表記している）を carême と carnaval というキリスト教の行事で表現するのはネルヴァルの『東方紀行』を参考にしたと言えるかもしれない。ゴーチエは『コンスタンチノープル』の中の1章を「ラマダンの一夜」*Une nuit du Ramadan* と題してこの宗教行事の描写に費やしている。ネルヴァルの『東方紀行』中のコンスタンチノープル関連部分とゴーチエの上記の作品を比較すると、この二人の作家の資質の違いがよくわかる。ネルヴァルはこの都市に関しては、事実に基づいており虚構の部分が少ない。それでも事実をもとにして小説の世界を作り上げる作家としての本領が發揮されている。ラマザンの体験だけをとっても、住居の移転から小バイラム参加、そしてコンスタンチノープルを離れるに至るまで、同地の人々との触れ合いを詳細に記述している。それに対してゴーチエの『コンスタンチノープル』は絵画的な要素にあふれた作品世界であると言える。すでに本論文で引用したサルガ・ムサはゴーチエのラマザン体験を次のように論じている。

Il faut dire que le moment de l'année où Gautier se rend dans la capitale de l'Empire ottoman n'est pas choisi au hasard : conformément à ce que prescrivent les guides de voyage, il choisit la période du Ramadan… (25)

ゴーチエがオスマン帝国の首都に行く時期は偶然に選ばれたのではないと言わなくてはならない。旅行ガイドブックが指示することに従って、彼はラマダンの時期を選ぶ。

ゴーチエは当然ネルヴァルの『東方紀行』を読み、ネルヴァルがラマザンをどのように描いたかを知った後にコンスタンチノープルに行ったはずである。ネルヴァルがラマザンを体験したのは1843年である。それに対してゴーチエは1852年である。11年の年月の開きがあるにせよ、ラマザンそのものには大きな差はなかったはずである。しかしそこから生まれた作品世界は大きく異なっている。ネルヴァル世界の多種多様な人々と風物に彩られた世界とゴーチエが描写した絵画のようなコンスタンチノープルの世界との比較は興味深いものがある。ルメールはゴーチエがコンスタンチノープルから獲得したことを次のように述べている。

Théophile Gautier vient de découvrir le dernier avant-poste de l'Orient, où l'art byzantin a fleuri, s'est développé et a donné naissance à la grande tradition picturale de la Renaissance. (26)

テオフィル・ゴーチエは東方の最後の前哨地点を発見したばかりである。そこではビザンティン芸術が花開き、発展し、ルネッサンスの偉大な絵画の伝統を生み出した。

友人同士であるネルヴァルとゴーチエの描いたコンスタンチノープルにも大きな差異がある。ネルヴァルはコンスタンチノープルの都市構造を描き、そこに

住む人々を活写し、そして自分自身も同地での体験を積極的に行おうとした。ゴーチエも同地での体験を積極的に行い、描写したことは同様である。しかしそれが出来あがった作品を読むと、どうしても画家がコンスタンチノープルを描くような態度を感じ取ることは否定できない。

VI. 結び

以上のように『東方紀行』の話者「私」はラマザン体験をするためにペルシア人になりますし、コンスタンチノープルのスタンブール地区からペラ地区に移り、同地区の隊商宿に住みついた。このことからこの都市の大きく二つに分かれる都市構造を指摘することができる。しかもスタンブール地区ではラマザン体験をしながら、昼はスタンブール地区でヨーロッパ人との交流も続けていた。ある時は夜もスタンブール地区で観劇を楽しんだりしている。このように境界が曖昧な二つの地区を行ったり来たりする生活は、後の作品群において発展され、ネルヴァル文学世界での重要なテーマとなる。(27)

注

- (1) 間瀬玲子「『東方紀行』における都市(5)－コンスタンチノープル－」『筑紫女学園短期大学紀要』34号 (1999. 1.), pp.1-19.
- (2) ラマザン (Ramazan) またはラマダン (Ramadan) と表記する。ネルヴァルは Ramazan のほうを採用している。ガリマール社・同朋舎出版編『イスタンブール「旅する21世紀」ブック 望遠郷2』京都, 同朋舎出版, 1994, p.348でもラマザンと表記している。なお同書では「イスタンブールの暮らし」というタイトルで1年間の主な祭りと行事を列挙している。
- (3) Gérard de Nerval, *Oeuvres complètes*, tome II, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler et avec le concours de Michel Brix et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p.605. 以下この巻を *OECII* と略す。
- (4) ネルヴァルの『東方紀行』を訳す際、『ネルヴァル全集III 東方の幻』東京, 筑

摩書房, 1998年に収録された野崎歓・橋本綱 訳『東方紀行』とG・ド・ネルヴァル著, 篠田知和基 訳, 『東方の旅一下』(世界幻想文学大系第31巻B) 東京, 国書刊行会, 昭和59年を参考にした。

- (5) Théophile Gautier, *Constantinople et autres textes sur la turque*, présentation et notes de Sarga Moussa, Paris, La Boîte à Documents, 1990, p.13. 以下この本を *CONSM* と略す。
- (6) *OECII*, p.1556. ジャック・ユレ Jacques Huré は注釈本の中で《*Le Journal de Constantinople*…du 26 septembre précise que le Ramadan a commencé le 25 septembre.》(Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, volume II, présentation et notes Jacques Huré, [Paris], Imprimerie nationale, 1997, p.439. 訳: 26日の『コンスタンチノープル新聞』はラマダンが9月25日に始まったとはっきり述べている。)と書いていて9月25日に始まったとの説の根拠を示している。以下この本を *VOJHII* と略す。
- (7) Gérard de Nerval, *Oeuvres complètes*, tome I, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven D'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989, p. 2011. 以下この巻を *OECI* と略す。
- (8) Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, tome IV, texte établi et annoté par Gilbert Rouger, [Paris], Imprimerie nationale de France, 1950, p.319.
- (9) *OECII*, p.636.
- (10) *OECII*, pp.636-637.
- (11) *OECI*, p.1404.
- (12) この書簡を訳すに際し,『ネルヴァル全集IV 幻視と綺想』東京,筑摩書房, 1999年, pp.443-446を参考にした。
- (13) Mairie de Paris, *Exposition Gérard de Nerval*, choix des documents et rédaction du catalogue par Éric Buffetaud, Bibliothèque historique de la ville de Paris, 1996, pp.90-92.
- (14) *OECII*, p.637.
- (15) 《Cette colonne de porphyre, aujourd’hui noircie par les incendies, fut, dit-on, apportée de Rome par Constantin (...) .》(*OECII*, p.1575.) ジャック・ユレは彼の校訂版で次のような注をつけている。《Colonne de Constantin érigée au-dessus de reliques du paganisme…》(*VOJHII*, p.442.) (訳: 異教の聖遺物の上に立てられたコンスタンティヌス帝の柱である。)
- (16) *OECII*, pp.659-670.
- (17) *OECII*, p.638.

- (18) *OECII*, p.639.
- (19) 伊吹武彦 他編『仏和大辞典』東京, 白水社, 1981年発行, pp.394-395.
- (20) 『仏和大辞典』, pp.397.
- (21) *OECII*, p.780.
- (22) *OECII*, p.780.
- (23) Théophile Gautier, *Constantinople*, préface de Gérard-Georges Lemaire, Paris, Christian Bourgois Éditeur, coll.《10/18》, p.16. 以下この本を CONGGL と略す。
- (24) *CONGGL*, p.120.
- (25) *CONSM*, p.22.
- (26) *CONGGL*, p.18.
- (27) 『東方紀行』のコンスタンチノープル関連部分では, 話者「私」は何の恐れもなくペラ地区とスタンブール地区の境界を通過し行き来を行う。しかしネルヴァルの最後の作品である『オーレリア』*Aurélia*においては話者「私」にとってありとあらゆる境界線が恐れの対象となり, 震えながら通過することになる。